

「チャペルでの初体験」

陶山義雄（元明治学院高校教諭）

それは、1948（昭和23）年4月初旬に行われた明治学院中学校の入学式のことであつた。私は前年の12月17日に2歳下の妹を栄養失調で亡くし、その悲しみを抱えたまま入学式に臨んでいた。家は戦災で失い、戦禍の傷が日本中を覆っていた中での旅立ちであつた。少年の傷を癒すかのように、明治学院キャンパスは無傷であり、村田四郎院長の式辞は人生を希望へと変える炎を灯してくれた。「聖書は一貫して平和を伝えている。敗戦国となつても、惨めに思う必要はない。イエス・キリストは戦禍の中で私たちと一緒に苦しんでおられる。以前の敵や加害者を憎んではならない。赦し、赦されて新たに生きるのが明治学院であり、神から招かれた君たちなのである。イエスが十字架上で着せられた紫の衣は、為政者による屈辱的な仕打ちではあつたが、実は、最も深い和解と平和の象徴が紫である。君たちは菖蒲のようにこれから真っすぐ立ち上がり、紫を誇りにして生きなさい。（式辞概要）」兄弟愛を証しているかのようにチャペル右袖最前列には、オールトマンズとハナフォード両宣教師がおられた。式典のあと、両先生は日米捕虜交換船で帰国されたが、戦後直ぐに明治学院に戻って来られたと紹介された。平和の証を実際に体験してから、礼拝堂は私の心の故郷として今でもあり続けている。明治学院キャンパス内に住んでおられた先生方にお会いするたびに、私は入学式で当初抱いた敵愾心を恥じ入っていたのである。ハナフォード先生が翌年にご帰国なさる前に、そのことを申し上げお詫びしたが、日本語での文通から英語に代わり、1963年、アメリカ留学の途上、少年時代から抱き続けた先生ご夫妻への罪責感を償う意味を込めて、私はシンシナティで引退生活をしておられる、先生をお訪ねすることが出来た。そのこともあって、ピアノの上に先生を記念する一文を記させて頂いた次第である。

※「スタインウェイ・アップライトピアノ」について

このピアノは1921（大正10）年から1950（昭和25）年まで明治学院宣教師であつたH.D.ハナフォード（1887～1973）先生ご夫妻がご自宅の宣教師館で愛用されたもので、1950年6月に日本を去る時に、この礼拝堂に寄贈されたピアノである。それまでは、古い、音量も足りなくなったハルモニウム・オルガン（現在は記念館に収蔵展示）を礼拝時に使用していたが、以降は1966年にヴァルカー社のパイプ・オルガンが設置されるまでの間、このピアノが伴奏をつとめていた。先生は1931年より日本の讃美歌改定委員をつとめられ、その功績は1954年に編纂された讃美歌序文に記されている。米国長老派教会が明治学院を支えて下さった記念としても、永くこのことを覚えておきたい。